

遊戯主人選定『庚子蕊宮花選』

——花 榜 と 花 選 ——

樽 本 照 雄

花 榜

花榜というのは、妓女コンテストである。

澤田瑞穂氏の説明によれば、「美人番附のことで、上海花柳界の妓女のコンテストをやって、その女王を『状元』に選ぶ。わが明治時代にあった芸者品定めあれとおなじものであった」¹⁾ という。

妓女を「花」にたとえる一方、「榜」は科挙試験合格者を公表する際のプラカードそのものを意味する。つまりは科挙試に見立てた妓女コンテストで、お遊びである。第1番が状元であれば、当然、第2番は榜眼、第3番は探花の名称で選ばれたであろうことは容易に想像がつく。

花榜は、順治13年(1656)秋、蘇州で行なわれたのを起源に、清代同治、光緒年間に広く盛んになったという。²⁾

上海において花榜がいつ始まり、どう普及していったのかを知る手掛かりになるのは、今のところ上海研究資料解題の類によるほかない(以下、この類の書籍は附近の図書館に所蔵されず、残念ながら原本はすべて未見)。

光緒3年(1877)の公子放『上海書仙花榜』に28名の名妓が選ばれ、それぞれに花名が当てられた。これが比較的年代のはっきりしているもので、それ以前の兎癡道人『二十四女花品図』あたりが最初らしい。³⁾

1) 澤田瑞穂「遊戯——清末小説管見——」『野草』第2号1971.1.15, 7頁。

2) 王書奴『中国娼妓史』上海生活書局1934. 11初版, 1935. 3再版。影印本による。311頁。

3) 同上。311頁。

光緒5年(1879),花下解人原輯『百花榜』(光緒10年に上海王氏が『上海品艶百花図』と改題の上,木刻出版した)では,名妓を高品、美品、逸品、艶品、佳品に分け,全部で百名を選出,これにも花名をつけている。⁴⁾

王韜(仲弢)『淞濱瑣話』巻7には,光緒8年(1882),光緒9年(1883),光緒14年(1888)に花榜が行なわれたとある。⁵⁾

光緒10年(1884),申報館活版本『海上群芳譜』4巻(原題『莫釐峯顧曲詞人評花』)も同じく名妓百名を,清品、雋品、逸品、秀品に分け,花名を付ける。⁶⁾

同年,王氏木刻袖珍本『滬上新画百美图』1冊には,美人番附が収録され,光緒20年(1894)の晚香居士編石版本『海上名花四季大観』にも妓女番附があるという。⁷⁾

遊里という限られた地域において,花榜に類するものが数多く催されたであろうことは,これら数書の解題を見るだけで理解できよう。記録に残らなかったものも,これ以上あったはずである。

ただし,ここまでは妓女百名を遊ぶといっても,その行ないはごく私的なものであったのではないか。あくまでも遊里という限定された場所において盛んな行事であり,一般社会とは隔絶された,好事家達のお楽しみであったと考えられる。

基本的にはお遊びではあっても,李伯元が小新聞『遊戯報』を創刊し,遊戯報社主催で花榜を行ないはじめると,今まで遊里内に閉じ込められていたささやかな好事家達だけの行事は,一挙に社会的な広がりを持つに至った。大量印刷,大量配布というマスコミの威力である。

『遊戯報』は,光緒23年五月二十五日(1897.6.24),⁸⁾ 李伯元によって創刊

4) 上海通社編著『上海研究資料』上海中華書局1936。5。影印本による。583頁。

5) 陳伯熙編『上海軼事大観』上海泰東図書局1924.2,六版。下巻90頁。ただし,『淞濱瑣話』は光緒十三年の作らしく,光緒十四年の花榜にふれているのは不可解。

6) 前出『上海研究資料』589-590頁。

7) 両書とも米沢秀夫「上海史研究資料解題」1『上海』No.962,1937.10.10,99-100頁による。また同文は,「上海史文獻解題」の一部として米沢秀夫『上海史話』(畝傍書房1942.7.10)に収録。

8) 魏紹昌編『李伯元研究資料』上海古籍出版社1980.12,5頁。450頁。創刊年月日が始めて明示された。以下『資料』と略す。

された。1910年頃、5000号を出して停刊したらしいが、李伯元が直接たずさわったのは創刊時から3年余りの1900年末か1901年初までであるという。⁹⁾ わずか3年余りの関係しかなかったというのは、たぶん彼が別に『世界繁華報』(光緒27年三月十九日<1901.5.7>¹⁰⁾ 創刊)を発行しはじめたからであろう。

魏紹昌氏は、その編著『李伯元研究資料』の中で、李伯元が『遊戯報』紙上において、林黛玉、陸蘭芬、金小宝、張書玉という4人の妓女を「四大金剛」と為した、と述べたあと、丁酉(1897)、戊戌(1898)、庚子(1900)の3回にわたって花榜を行ない、その他、何回か「葉榜」「武榜」および「芸榜」を開催したと、はなはだあっさりとは注しているのみである。それ以上の言及はない。

『遊戯報』を筆頭に、その他の新聞紙上で行なわれた花榜の記録を、陳伯熙編『上海軼事大観』のなかから抜き出すと次のようになる。

開催年	主催紙	花榜状元	芸榜状元
1898光緒戊戌	遊戯報	小林絳雪	小林宝珠
1899光緒己亥	〃	小花四宝	張五宝
1900光緒庚子	〃	小祝如椿	□□□
1902光緒壬寅	花天日報	張菊仙	洪雪香
1903光緒癸卯	〃	陸琴仙	錢宝玉
1904光緒甲辰	花世界報	趙香玉	金小菊
光緒□□	閑情報	万里娟	×
1906光緒丙午	娛言報	金艷紅	×
1909宣統己酉	采風報	金如意	×

比較的まとまった記録で、これからも花榜、芸榜がほとんど毎年のように行なわれていることがわかる。

もともと小新聞は政治を語らず、役者の評判記、遊里のニュースなど一般に

9) 同上。5頁。

10) 同上。5頁。457頁。『世界繁華報』の創刊年月日を明示したのも、この資料がはじめてである。ただし、光緒27年三月十九日を『資料』では1901年4月7日とするが、5月7日が正しい。

受け入れられやすい記事しか掲載しなかったらしいが、それに加えて花榜の開催も部数を伸ばす一要因であったであろう。

内藤湖南が最初の中国旅行を行なったのは、明治32年（1899）9月より11月までの3ヵ月であった。当時中国で発行されていた各新聞について、発売部数を次のように記している。実際の部数を指摘したものを他にあまり見かけないので資料として引用しておく。

因みに記す、上海の新聞紙は漢英並に数種あれども、一も売高の万に上れるはあらず、申報は旧き株にて、今は其の記事論説の更に見栄せざるも、七千内外の売高あり、新聞報、中外日報は之に次ぐべく二千より三千位の間なるべく、滬報は一千内外、蘇報は更に少かるべしとの事なり、独り小新聞たる遊戯報の発售は万以上に至る、英字の方は北清日報最も多くして五六百ならん、チャイナ、ガゼット其他は遙かに少しと云ふ。（中略）天津の国聞報は、かの地方にて独占事業の姿あれば、案外に売高多く、三千内外なるべし¹¹⁾（後略）

マスコミというのは比較の問題であって、「遊戯報の発售は万以上に至る」というのは、やはり他紙を圧倒した存在であると考えなければならない。

マスコミが取り上げればますます話題になるという相乗効果もあり、『遊戯報』にならう小新聞が陸続と現われるのも無理からぬことだ。

李伯元の行なったものを総称して艶榜三科という。¹²⁾花榜、武榜（歌をよくして著名なる好女を選ぶ）、葉榜（遊里の侍女を選ぶ）の三つである。

その他、李伯元は光緒24年（1898）冬から翌年春にかけて、龍華に妓女たちの墳墓を建立することを発起している。¹³⁾

いわゆる艶榜三科のほかに、紅樓夢の登場人物に見立てたものもあったらしい。¹⁴⁾

11) 内藤湖南「燕山楚水」『内藤湖南全集』第2巻筑摩書房1971.3.25, 67-68頁。

12) 前出『中国娼妓史』312頁。

13) 前出『資料』518頁。

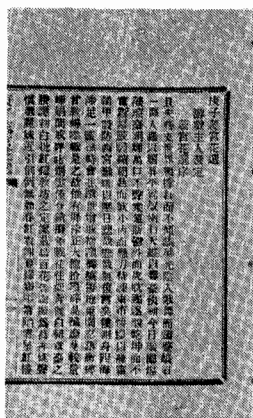
14) 前出『中国娼妓史』312頁。

また、少し時が下り、花柳界でもないが、民国2年(1913)には『順天時報』で辻聴花が、俳優の芸風を中国料理に見立てたり、同じく、北京、上海の俳優たちの中から状元、榜眼、探花等を選定する「中国梨園榜」(1914年1月1日)等を発表している。¹⁵⁾

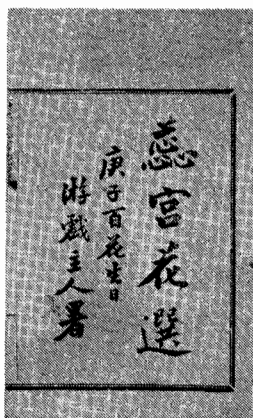
以上、花榜の流行ぶりはわかるのだが、疑問がないわけではない。

榜と称し科挙にならうのなら、妓女の資格規定など、当然あったのではないか。選考規準あるいは選考過程を解説した本があるはずである。¹⁶⁾

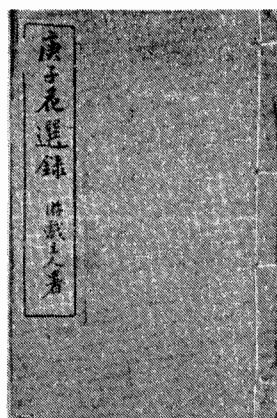
しかし、『遊戯報』等の新聞そのものを確認できない。もっぱら花榜が行なわれたと記述する2次資料にたよらざるを得ず、詳細は明らかになっていない。



本文



扉



表紙および題簽

花選

遊戯主人選定^{こうしげいきゆう}『庚子蕊宮花選』と題する小冊子がある。

タテ17cmヨコ11cm, 日本でいえば新書判にあたる。本文は四号活字大の活版印刷。わずかに16葉の線装本である。

15) 中村忠行「中国劇評家としての辻聴花(一)」『新中国』(『老朋友』改題)1956年新春号, 1956.2.12, 50—51頁。

16) 「中国梨園榜」には「私選名伶規則」があり、男伶は20歳以上、童伶はそれ以下、女伶の年齢は問題にしない、等の制限がもうけられていたという。同上。花榜にもこれに該当するものがあつたはずなのである。

発行年は記されていないが庚子とは1900年だから、おおよそ80年前の印刷物だ。新聞用紙に印刷され、黄ばむことはなほだしい。

目次風にその内容を記す。()は樽本注。

題簽 庚子花選録 遊戯主人署

扉 蕊宮花選 庚子百花生日 遊戯主人署

版心 庚子蕊宮花選

本文 遊戯主人選定 蕊宮花選序 一・二

薦函彙誌 一・二 (推薦状の内訳)

選艶叢談 一～三 (経過説明と講評)

蕊宮花選題詞 一～九

遊戯主人 (李伯元)

茂苑惜秋生稿於寓齋 (歐陽鉅源)

病紅山人稿於滬上旅次 (龐棟才)

横山旧主 (未詳)

惜秋生贅墨 (歐陽鉅源)

東瀛放浪子 (日本朝日新聞通信員・牧卷次郎)

放浪又筆 (同上)

頤瑣室主稿 (未詳)

附録

蕊宮は、「天宮をいふ。香草の繁つてゐる宮殿の意」(諸橋大漢和辞典)ということ、言うまでもなく花柳界を指す。すなわち蕊宮花選とは、花榜と同じく実質は妓女コンテストのことである。

遊戯主人は李伯元の筆名のひとつ。

百花生日(種々の花の誕生日)は、花朝とも言う。周瘦鵬『花花草草』によると、花朝の日に三説あるという。一説、宋代洛陽では二月二日。二説、東京では二月十二日。三説、成都では二月十五日。いずれも野草を摘んだり、蝶をつかまえたりして色どりを添えたということだ。蘇州の風俗としては、陰曆二

月十二日を花朝とし、少女たちが赤い紙で三角形の小旗を作り植木ばちにさし、花の誕生日を祝うという。周瘦鵬自身、毎年、花朝前後に梅花が咲く頃には必ず友人7、8名を招き、宴会あるいは茶会を開いて梅を觀賞しながら百花の誕生日を祝うのを喜びとしていた。¹⁷⁾

花選挙行の経過を選艶叢談の記述によってまとめると次のようになる。

●戊戌（1898）四月八日 遊戯報に名妓選び（司花）の記事がのる。遊里の名妓12名を月ごとに一花を選ぶ。これが花選の始めである。花麗娟ら12名を選出。

●己亥（1899）花朝日に挙行することに改め、蕊宮花選と名づける。林宝珠ら12名を選出。

●庚子（1900）二月初三日 推薦状を広く募集することを紙上に掲載し、花朝日に発表することにする。

———初三日、初四日の両日、蕊宮花選規定を遊戯報に掲載。推薦者が記入しやすいように12の花名をつらね、また花選規定8条を定める。花名は従来通りであるが、閏月があるので桐花一名を加える。

———初七日 推薦書の締め切り。

———十一日夜 金谷香（イギリス租界にある西洋料理屋）を借り、多数の美女を招いて品定めする。

二月十一日夜に名妓の品定めを行なったのだから、結果発表が遊戯報にのるのは二月十二日であろう。故に、本書の扉にある蕊宮花選に続けていう百花生日とは、三説ある中の二月十二日に当る。

また、最初から花朝の日に挙行していたのではなく、次年よりその日に改めたというのも、名妓の誕生（選出）はいつでもいいというわけではなく、百花生日というその日こそふさわしい、ということであろう。司花、花選、花朝、百花生日、花名と花づくしにする方がお遊びに適っている。

中国の民謡、数え歌のなかに、ふるくから1年12ヵ月に花名を組み合わせた十二月調（唱春調）、特に十二月花名というものがある。たぶんこれを花選に

17) 周瘦鵬『花花草草』上海文化出版社1956.9, 6-8頁。

結びつけたのであろう。¹⁸⁾

ついでに言えば、1900年に閏月があるので桐花一名を加えるとあるが、第1回花選の年である1898年にも閏月があり、このことから徐々に花選の体裁を整えて行った、あるいは名妓のワクを広げて人気をあおった、と見ることが出来る。

花選規定8条を見てみる。

一、年齢十八以内、十三以上の者を入選とする。

一、選出には容色を重くし、芸はこれに次ぎ、接待に巧みでなければならない。

一、去年の選に連なった者は再び採らない。

一、現在、女兒芝居に籍を置く者は選ぶ必要はない。

一、今年初めて妓女となった者は注記する。

一、行ないが正しくなく、評判の平凡な者は採らない。

一、一度嫁ぎ、また出てきた者および子供を生んだ者はとらない。

一、淫売婦出身者は採らない。

年齢が13～18歳とはいかにも若いような印象を与えるかも知れぬが、当時の花柳界では年少の者、せいぜい20歳くらいまでがもてはやされた。年をとるにつれて位は下落する。

容色一番、芸二番、あつかい上手は当り前とか、勝者不再選、初顔見せはマークせよ、出戻り子持ちはいりません等、とりたてて言うほどのこともない。

ただし、女兒芝居関係者と淫売婦出身者は採らない、というのには問題がある。

女兒芝居というのは女の子供だけで催す芝居のことで、中国にははるか以前からあったらしい。ただ正式な名称が与えられなかったところに、李毛児という男が十数名の女兒を訓練して人々の慶事に応じた。これが評判となり、彼の名を取り「毛児戯」と呼ばれたが、好事家が「髻児戯」と改め、この名称が定

18) 澤田瑞穂「清代歌謡雑稿(一)」『天理大学学報』40輯1963.3.31参照。

着する。「鬚」は「毛」と同音であり、その意味は眉あたりまでたれた幼児の髪をいい、女兒のイメージにかさなる。また、「時鬚」という単語を連想すれば「流行」の女兒芝居ということにもなる。

1900年頃、上海で群仙茶園という女兒芝居劇団が正式に発足した。代々芸人の家の女兒も参加していたり、あるいは退役した老妓、林黛玉、翁梅倩等も何人かいたが、それは客員としてである。主力の団員は、誘拐して来たり、売られて来たり的女兒で、その待遇は奴隸と変わらなかったという。¹⁹⁾

花選の規定では、これら不遇の者達を選出の対象から除外する。

林黛玉といえば李伯元が『遊戯報』紙上で「四大金剛」に選んだ者の一人である。その林黛玉が、同じ李伯元の主催する花選において選抜の対象から除かれた人達に関係していようとは皮肉なものだ。

科挙試の前段階である学校試を受けるには特別の資格はいらない。ただし、いくつかの制限があった。たとえば、奴僕、娼優、隸卒、地方特有の「賤業」等に父祖三代の間に従事していないもの、²⁰⁾ というのはひとつの例である。

娼館、妓楼などの経営に従事したものであってはならない、という項目から当時の妓楼関係者の社会的地位が想像される。妓楼経営者がそうであったなら、そこに使われる妓女の社会的地位は、言うまでもなく低い。それら差別されていた妓女を選出の対象とした花選において、また、女兒芝居関係者、淫売婦出身者を採らぬという差別を行なっているのだ。

表面上は華やかなお遊びではあっても、その内実は、差別される者が自ら差別する対象を設定するという、どうしようもなくうつろしい意識に満たされていた。

以上の経過と規定により、庚子の花選では、正選12名、閏月1名、備選10名が選出された。ここでは正選と閏月のみ参考までに掲げておく。

正選12名

梅花^{うめ} 凌鈺卿 年十六歳 姑蘇人 住迎春坊三弄(2)

19) 鬚兒戯については、赫馬『上海旧話(-)』上海文化出版社1956.12, 8-12頁による。

20) 宮崎市定、秋田屋版『科挙』1946.10.20, 56頁。中公新書版『科挙』1963.5.25初版, 1972.8.15二十一番, 20頁。

牡丹 <small>ぼたん</small>	沈桂雲	年十八歳	琴川人	住迎春坊二弄(4)
蘭花 <small>らん</small>	花賽玉	年十五歳	姑蘇人	住兆貴里 (3)
梨花 <small>なし</small>	金佩蘭	年十七歳	姑蘇人	住新清和里 (1)
榴花 <small>ざくろ</small>	金月蘭	年十七歳	姑蘇人	住日新里 (4)
荷花 <small>はす</small>	小顧蘭蓀	年十七歳	姑蘇人	住西薈芳 (4)
海棠 <small>かいとう</small>	林湘君	年十一歳	姑蘇人	住迎春坊三弄(2)
桂花 <small>もくせい</small>	洪桂卿	年十八歳	姑蘇人	住惠秀里 (1)
菊花 <small>きく</small>	林新宝	年十七歳	江右人	住迎春坊三弄(2)
芙蓉 <small>ふよう</small>	馮秀卿	年十七歳	姑蘇人	住普慶里 (2)
茶花 <small>つばき</small>	高翠玉	年十七歳	姑蘇人	住同慶里 (3)
水仙 <small>すいせん</small>	花媚卿	年十六歳	姑蘇人	住兆貴里 (2)

閏月加選1名

桐花 <small>きり</small>	沈鸞鸞	年十九歳	姑蘇人	住迎春坊 (1)
----------------------	-----	------	-----	----------

末尾の数字は、推薦状集計（薦函彙誌）に見られる推薦数である。この薦函彙誌には、誰それが何々さんを梅花に推薦した、という風にずらりと名前が出されているが、集計すると全部で46名の旦那が73名の妓女をそれぞれ推薦している。しかし、数字を見てもわかるように、1～4票の間でばらつきがあるし、上にはあげていないが備選の李蘭香は9票、同じく杜采秋は5票と、必らずしも得票数と選出とが合致しているわけではない。

単なる得票数順ではないところに遊戯主人選定という意味があり、花榜とともに花選も科挙の見立てであるというのだ。李伯元の恣意が大きく作用する選出であるならば、彼は自分を天子と同一視していることにならないか。

花榜と花選は、基本的には科挙の見立てである。

両者の相違を見るならば、容色、芸、歌、侍女の優秀なる者を選ぶのをそれぞれ花榜、芸榜、武榜、葉榜と称するところから、これはいわば部門賞である。一方、花選とはそれらを総合した妓女コンテストと言うことが出来よう。

李伯元は、『遊戯報』紙上にて、1897年は花榜を、1898年は花榜と花選を、

1899年には葉榜と花選を、1900年にも花榜と花選を行なうといった有様で、これほど頻繁に挙行されれば一般社会の注目を集めるし、それにつれて新聞の実売部数も伸びようというものだ。

花榜、花選は科举にならっていたから、大本の科举が廃止されると両者ともにすたれてしまったのは当然のことであった。中華民国になり科举に替わって国会議員選挙が行なわれるようになると、花柳界では花国（界）選挙と銘打って往昔の花榜、花選が復活する。1917年のことだ。²¹⁾

中野江漢『支那の売笑』の口絵には、「順天時報社主催の北京『花国内閣』の当選披露」とあり、1921年1月1日付『順天時報』を紹介している。²²⁾ 花国大総統、副総統、國務總理等々を得票数順に選出しているのだが、よくよくみると「京国[●]花選[●]全体披露」（傍点樽本）とあり、花選の名称だけは生きていることに気がつく。

（たるもと てるお）

21) 前出『上海軼事大観』95頁。

22) 中野江漢『支那の売笑』支那風研物究会1923.12.30。中村忠行氏蔵。